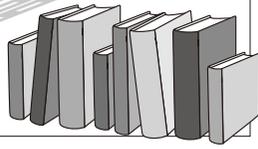


本棚



スウェーデンは放射能汚染から どう社会を守っているのか

高見幸子, 佐藤吉宗 共訳
防衛研究所, 農業庁, スウェーデン農業大学,
食品庁, 放射線安全庁 共同プロジェクト



本書は、チェルノブイリ原発事故を踏まえて、1997～2000年にスウェーデンの国防軍研究局が中心となり行われた放射能汚染から食料を守るためのプロジェクトの一環として刊行された一般向けの報告書の日本語訳である。チェルノブイリ原

発事故当時、スウェーデンでは放射能汚染への対応体制がほとんど整えられていなかった。これは、東京電力(株)福島第一原子力発電所事故が起きた際の日本と似た状況であったと言える。訳者の後書きによると、本書が福島第一原発事故を経験した日本の参考になると考えて日本語訳を出版したとのことである。

本書は4章立てとなっている。第1章では、チェルノブイリ原発事故からの警鐘として、事故から学んだ教訓、事故への備え、情報提供の重要性、原発事故がスウェーデンにもたらす影響評価がまとめられている。特に情報の発信という観点では当時のスウェーデン政府の対応が不十分であり、その対応として本書がまとめられたことが理解できる。

第2章以降には、今後事故が起こった際の対処の在り方が述べられている。第2章では、放射線と放射性降下物について述べられており、放射線の種

類、人体への影響、放射性降下物の特徴について解説されており、教科書的な内容である。

第3章では、放射性降下物をもたらす影響について、まず、スウェーデンでの農業・牧畜業の状況が述べられている。これを踏まえ、食物連鎖による人体の内部被ばく線量が降下物量からの数値として示されている。農業での移行要因として、スウェーデン農業大学による放射性Cs濃度の経年変動の調査結果が示されている。さらに、社会への影響についてまとめられており、予測が難しい心理的・社会的な影響へも真剣に対処すべきとしている。日本との違いとして特筆すべきは、トナカイ肉である。トナカイの放牧は原住民族により国土の40%で行われている。放射性Csを集積しやすい地衣類も餌にできる特性から、牧草が乏しい冬期間は地衣類を食べる割合が多くなるため、この時期のトナカイ肉の放射性Cs濃度は高くなる。長期間の傾向としては減衰していくが、放射性Cs量の季節変動が起こる食品はほかにはないと思われる。

第4章では、基準値と対策として、食品からの内部被ばくを防ぐために、基準値の決定、農作物、牧畜業、食品加工での対策、また、調理等の家庭における対策についてまとめられている。さらに、放射能汚染対策には戦略的行動が必要と述べられている。食品の基準値では、追加被ばくが年間1mSv以下となるような基準が当初設定されたが、翌年にはスウェーデン人の摂取量が少ない種類の食品については、基準値の引き上げが行われたとのことである。合理的な対応と理解はできるが、心理的な観点からは一般の理解を得るのは難しいのではないかと考えた。

本書を一読し、福島第一原発事故の影響がまだに残る日本に役立つものと確かに感じた。もし、事故前に本書の日本語訳があれば、安全神話があった当時では見向きもされなかったかもしれないが、冷静にかつ効果的な対策ができていたかも……と考えてしまう1冊である。

(松垣正吾 東京大学アイソトープ総合センター)

(ISBN978-4-7726-1054-4, A5判 172頁, 定価本体1,800円, 合同出版, ☎03-3294-3506, 2011年)